

イスラームにおける樹木をめぐる信仰の再考察  
——チュニジアにおけるオリーブの事例から——

二ツ山 達朗\*

Reconsideration on Faith Concerning of Trees in the Islamic World:  
In the Case of Olive in Tunisia

FUTATSUYAMA Tatsuro

The aim of this paper is to reconsider faith concerning trees in the Islamic world through the case of the olive tree in Tunisia.

There are “sacred trees” almost all over the Middle East and North Africa and they have been mentioned mainly by anthropologists. The previous studies explained that such a belief comes from the veneration out of fear of genies (*jinn*) and saint’s power and that these trees are venerated because they are the abodes of these supernatural beings. Thus, in the Middle East and North Africa, only individual trees which are related with a supernatural being like a genie or a saint have been focused on. On the other hand trees in general have not been focused on as a way to understand popular Islam. However, some of the theological studies have already pointed out that trees in general or some species in particular have important Islamic meanings. This case study focuses on the latter trees which are related to Muslim’s faith from an anthropological viewpoint, based on four months of field research (interview to 47 informants and participant observation). In the case of olive trees in Tunisia, they are regarded as sacred (*muqaddas*) and blessed (*mubārak*) trees and they are related to people’s faith without relation to genies and saint’s spirits. The informants explained that olive is mentioned in Qur’ān, olive oil is a medicine for all diseases, the olive brings a lot of merit, and only the olive can exist in almost dry climatic conditions. Thus, some reasons make the inhabitants regard them as sacred or blessed trees.

The previous studies explained that saints are “mediators” who “channel” Allāh’s *baraka* (blessing) to the people. However, this case shows that olive trees manifest Allāh’s *baraka* through curing their disease or giving valuable things to them. So it can be said that the olive itself can be a mediator between Allāh and Muslims.

The Previous studies focused on saints to understand popular Islam and they tend to disregard the materials in their ordinary life. However, as this case clearly shows, material can also manifest some of Allāh’s *baraka*.

## I. はじめに

本論文の目的は、イスラームにおける樹木の意味を、チュニジアのオリーブを事例に再考察することにある。この目的には以下のような背景がある。

イスラームの多様なあり方については、これまでも様々な議論がなされてきた [大塚 1989: 135; 小杉 1999; 東長 1999 など]。それらの多様なイスラームを示す代表格として着目されてきた研究対象として、各地の聖者信仰があげられる。地域の固有性と折り合いをつける聖者の役割は、多様性と具象性に通じる [赤堀 2005: 24] からである。ことに、中東や北アフリカをフィールドとし

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

ている人類学者は、民衆の間に根付いている聖者信仰に魅せられ、中心的な考察対象としてきた〔赤堀 2004: 231; 斎藤 2010a: 63〕。

一方で、人（聖者）以外のモノに着目した考察は、これとは対照的といってよい。近年では宗教的商品（religious commodities）などのモノを通じてイスラームの信仰を理解しようとする動きはあるものの〔Starret 1995; D'Alisera 2011 など〕<sup>1)</sup>、ムスリムの日常生活に関わるモノを対象にした考察は、中心的な位置をしめてこなかった<sup>2)</sup>。本論はこのような背景から、聖者のみではなく日常生活の中にあるモノを考察対象として、民衆のイスラームを理解するねらいがある。

これまでの研究が、聖者以外の対象に全く触れてこなかったという訳ではない。過去の民族誌的な記述を振り返れば、日々のムスリムと関わる日常的なモノや自然に対する民衆の信仰が多彩に記述されている〔Doutté 1984(1908); Westermarck 1926 など〕。しかしながら後述するように、それらの考察は、その対象を通して示されるジンなどの霊的な存在や聖者の力に焦点があてられてきたことが指摘できる。中東地域で聖樹（sacred trees）とされムスリムの信仰と関わるものは、聖者の魂が宿っている樹木であると解釈されるように〔Dafni 2006, 2007〕、多くの場合その背後には聖者（もしくはジンなど）の存在があるとされてきた。ある特定の樹木や岩などの自然物を対象とし、そこに顕現するジンや聖者などの存在に焦点があてられてきた一方で、樹木自体が民衆のイスラームの信仰にどのように関わり、彼らの信仰にどのように位置づけられているかという考察はなされてこなかった。

本論で示すチュニジアのオリーブの事例は、そのような精霊や聖者の存在なしにもある種の樹木がムスリムの信仰に深く関与し、イスラームの信仰の一部を担っているというものである。本論ではフィールドワークで得られた資料から、これまで考察されてきた樹木をめぐる信仰とは違う事例を提示する。このことにより、先述したような人（聖者）だけでなく、ムスリムの日常生活に関わっているモノに着目した考察が、多様なイスラームを理解する際の鍵となりうる可能性を述べる。

以下では、第2節において、イスラーム世界各地にみられる樹木をめぐるムスリムの信仰の先行研究をまとめ、それらがイスラームにおける樹木の神学的な議論とどのように違うのかを述べる。第3節では、調査対象地域であるチュニジアにおいて、オリーブがどのようにみなされているかを示した上で、農村において現地のムスリムがどのようにオリーブと関わっているかを述べる。第4節では、この事例を出発点として、それがムスリムの信仰にとってどのように位置づけられるのかを考察する。第5節では、それらの考察から得た視座が、民衆のイスラームを理解する際に果たす可能性を述べる。

## 2. 樹木をめぐる信仰の先行研究

### 2-1. 樹木をめぐる民衆の信仰の解釈

中東・北アフリカ地域における各地の民衆の信仰を記録した詳細な民族誌のなかには、樹木や巨岩、泉など多様な自然に対する人々の関わりが記されてきた。それらの先行研究は、対象を通して顕現するジン（精霊）や聖者（聖者の霊、聖者の魂、聖者の力）などといった存在とともに考察が行われてきたという点で共通している。以下ではまずジンや天使など、次に聖者と関わる先行研究をまとめる。

- 
- 1) モノに関しては、聖遺物をめぐる研究も近年なされているが〔小牧 2002; 大稔 2009 など〕、これらの研究も聖者の力やバラカを示すものとしての聖遺物であるために、聖者信仰の研究に包摂されるといってもよいであろう。
  - 2) このことは、イスラームの鍵概念であるバラカについても同様であり、斎藤がバラカ概念をめぐる研究が聖者に偏ってきたとする考察〔斎藤 2010b〕にも通ずるであろう。

Doutté は、不思議で神秘的な力が、霊たち (esprits)、悪魔たち (démons)、神々 (dieux) などといった存在に擬人化 (personnification) されていると述べる [Doutté 1984(1908): 438]。このように、樹木に関係する超自然的な現象が、霊やジンなどといった存在によるものとみなされている事例に着目した研究は多い。例えば、樹木にいるとみなされている精霊 (génie) を恐れ、うやまう [Astley 1910: 122–123; Dermenghem 1982(1954): 36–38]、樹木などに取り付くジンが病気を治す [Westermarck 1926: 66, 73, 87, 85, 87]、アカシアにはアカシアの住民 (inhabitants) がおり、果実を使用すると祟りがある [Hornblower 1930: 17–19]、樹木の枝を折るとそこにいる天使やジンの怒りに触れる [スミス 1941: 238]、天使や悪魔が住んでいるとされる樹木を恐れ、うやまう [Goldziher 1971: 316–317]、ジンが出没するイチジクの枝に祈願する [Crapanzano 1973: 80]、ナツメヤシが実をつけない場合、そこに住んでいる霊 (spirit) によるものだとして脅す [Altman 2000: 45]、などといった事例である。

このような樹木の霊的な存在に対する信仰は、イスラーム以前の信仰が異端ながら残っていると理解される [Goldziher 1971: 318; Reat 1975: 5–8]。同様に、アニミズム的なイスラーム以前の信仰が現代においても残っている [Astley 1910: 122–123; Hornblower 1930]、影響している [Zwemer 1920; Brett 1990: 31]、融合している [Parshall 2006: 61–66] などといった解釈も多い<sup>3)</sup>。これらの研究は、そのような信仰がイスラームの外にあるものであり、それがイスラーム世界にも残っている、融合していると解釈する点で共通している。

一方で、聖者と樹木との関わりに注目した事例も、中東・北アフリカの様々な地域で報告されてきた。これらの研究は、聖者というイスラームに認められた存在が樹木を通して顕現されることから、イスラームの信仰のなかに位置づけて解釈している [Dafni 2006: 9]。この点において、先述の解釈とは異なっているといえる。

これらの事例においては、聖者にまつわる伝説などによって、樹木と聖者が関連付けられている。例えば、聖者が座るなどして休んでいた樹木 [Zwemer 1920: 214–215; Westermarck 1926: 49, 62, 68]、聖者が植えた樹木 [Hornblower 1930: 17]、聖者が水浴びをした場所にあった樹木 [Westermarck 1926: 66]、聖者が説教をしていた場所にある樹木 [Reilly 1981: 95]、根元に聖者が埋葬されているとされる樹木 [Westermarck 1926: 67–68; 大塚 1989: 95–96] などが、他の樹木と差異化され、時には聖者同様に聖なる樹木とみなされる。樹木にシャイフの魂が宿る (dwell) [Buhl 1947: 95–96]、樹木自体が聖者の墓とされることで樹木に聖者が宿る [Goldziher 1971: 318] などの事例もある。このように、様々な聖者の「ゆかり」により、聖者の魂や力が樹木に存在するとみなされ、ムスリムに働きかける事例が着目されてきた。

現地のムスリムは、このような樹木に顕現する聖者の存在に対して、恐れたり、とりなしを願ったり、祈願をしたりといった様々な行為を行う。例えば、聖者の魂を尊重して樹木の幹や枝を切らないようにする [Jaussen 1908: 333; Westermarck 1926: 67, 74–75]、聖者廟の周囲にある樹木を保護する [Deli et al. 2005; Taïqui et al. 2009]、樹木を切る際には祭りや捧げ物をする [Blackman 1925: 56] などである<sup>4)</sup>。また、聖者の許しを請うために、収穫物や家畜、農機具、財産などを樹木に捧げる [Reilly 1981: 95; 鷹木 2000: 209–210; Dafni 2007: 11] といった事例も多い。また、豊作や家畜の安全の祈願や、病気治癒や子授けなどを願うことも多く行われてきた [Westermarck 1926: 67–

3) アニミズム的な解釈以外にも、Dermenghem は樹木をはじめとしたあらゆる対象に見出せる信仰をマナのようなものとし、先史時代から継承されているという理解をしている [Dermenghem 1982(1954): 36]。

4) これらの樹木を保護する理由として、切った後に切り株から血が出るなどといった伝説が付随している場合が多い [Westermarck 1926: 67–68]。

68, 75–76; Sharma & Pegu 2011: 2]。病気治癒や子授けを求めて樹木に布や服を捧げたり、釘を打ち付けたりする事例も多く見られる [Astley 1910: 122–123; Doutté 1984(1908): 436–438; Westermarck 1926: 75–76; Hornblower 1930: 17; 大塚 1989: 95–96]。Dafni は樹木に衣服や布をまきつける行為は、中東・北アフリカの様々な地域で広く見られ、病気治癒と聖者の魂をなだめる目的である共通点を指摘する [Dafni 2002]。具体的な祈願だけでなく、幾世代も前の聖者の霊 (genius) から恵み (blessing) を得る [Astley 1910: 122–123] などといった事例のように、漠然と恵みを求めて樹木をうやまう事例もある。

Dafni は、中東地域で聖樹 (sacred trees) とされムスリムの信仰と関わるものは、聖者の魂が宿っている (abode of the spirit/soul of a saint) 樹木であるとする [Dafni 2006; 2007]<sup>5)</sup>。同様に、Zarcone はイスラーム世界において樹木や石に関する信仰のほとんどは聖者と関わる事によって崇敬の対象になっていると述べている [Zarcone 2005: 41]。この議論からも、聖者と関わる樹木が、樹木をめぐる信仰を考える際の中心的な考察対象となってきたことが理解できよう。

このように、中東・北アフリカにおける樹木とムスリムの信仰との関係についての考察は、常に樹木の背後にある聖者やジンなどの存在が前提とされてきた。Kan‘ān が、樹木自体を崇拝 (venerate) しているのではなく、神のような人 (godly person) から (樹木に) もたらされる神の力を崇拝していると述べるように [Kan‘ān 1928: 151]、民衆に対して神の力を発揮するのは樹木ではなく、そこに示される神の介在者である聖者であるとみなされてきた。その一方、樹木そのものが現地のムスリムにとって持つ意味や役割は等閑視されてきたといってもよい。

## 2-2. 樹木をめぐる神学的議論の解釈

このような研究とは別に、イスラームにおける樹木の意味を神学的な観点から考察する研究が存在する。Reat は、クルアーンや、ブハーリー、イブン・ハンバルなどのハディースに依拠しながら、イスラームにおける樹木の意味や象徴を考察している<sup>6)</sup> [Reat 1975: 8–19]。Schimmel も、クルアーン 14 章 24 節<sup>7)</sup> を用い、樹木はすべての良いことのシンボルであり、よい言葉とは樹木のようなものであるとする [Schimmel 1994: 17]。Musselman はクルアーン 14 章 24–25 節や 56 章 27–33 節において、イスラームにおいてよき信者や天国を示すシンボルとして樹木が記されている事を述べている [Musselman 2003: 48]。このように、樹木のイスラームにおける意味や象徴性について、クルアーンやハディースなどのテキストをもとに考察したものとしては、他にも [Lechler 1937: 369–370; Farooqi 1997; Waines 2001: 358–362; Leaman 2006: 451–457; Marwat et al. 2009] などがあげられる。

これらの考察はイスラームの神学的な側面に着目した考察であり、実際のムスリムたちが、それらの樹木とどのように接しているかという考察は、なされてこなかったと言ってよい。前述したように、現地のムスリムと樹木との関わりは、ある特定の樹木を対象として、その背後にある聖者やジンの存在と共に考察されてきたのである。先述した Reat においても、神学的な考察をしつつも、実際のムスリムと樹木との関わりについては、ジンや天使などの超自然的な存在が宿っていると現地地のムスリムからは考えられており、それらはイスラーム以前の異端的な信仰や迷信であると解釈

5) Dafni は、実際には中東地域において聖者との関係が見いだせない樹木に対する信仰があったとしても、歴史の中で聖者の存在が抜け落ち、樹木への崇拝だけが残っている可能性があるとも述べる [Dafni 2007: 7]。

6) Reat によれば、クルアーンの記述に加えて、いくつものハディースにおいて樹木が「幸運の樹 (*shajara al-jūbā*)」と記されているとし、イスラームにおける樹木の意味の重要性を論じている [Reat 1975]。

7) 14 章 24 節にある「それは良い木のようなもので、その根は固く安定し、その幹は天に (聳え)」(『日亜対訳・注解 クルアーン』日本ムスリム協会) という部分はその論拠として示されている。

している<sup>8)</sup> [Reat 1975: 6-7]。

このように、実際のムスリムの間における樹木をめぐる信仰の考察と、イスラーム世界における樹木を啓典などのテキストから考察する場合との間には乖離がある。前者はある特定の樹木を取りあげ、それらが聖者やジンなどの霊的な存在や力を民衆に顕現させる有様を考察してきた。後者はテキストをもとに、特定の樹木ではなくある種の樹木や樹木全体が、イスラームにおいてどのような意味を担っているかということ論じてきた。聖者やジンといった存在によることなく、樹木が現地でのムスリムの信仰にとってどのような意味を持ち、何をなすのかという考察はなされてこなかったことが指摘できよう。

### 3. チュニジアにおけるオリーブの事例

本節でははじめに、チュニジアにおけるオリーブの概況を簡単に述べた上で、フィールドワークから得られたデータをもとに、チュニジアのムスリムにとってオリーブがどのような存在であるかを論じる。

#### 3-1. チュニジアにおけるオリーブの概況

オリーブ (*Olea europaea* L.) はフェニキア時代以前からチュニジアで栽培されていたとされ、古くからオリーブ油による地中海交易がなされていたとされる [Larbi et al. 2009]。現在でもオリーブ油が輸出に占める割合は高く、2005年にはオリーブ油は食糧輸出額の34.9%を、総輸出額の2.7%を占めている<sup>9)</sup> [Labaied 1981: 54]。

チュニジア国内には約6600万本のオリーブが植えられており、農業従事者のうち約20%はオリーブに携わっているとされる [Karray et al. 2009: 6]。大規模な農場経営者による栽培は少なく、10ヘクタール以下の農地が全農地の57%、5ヘクタール以下の農地が35%を占め<sup>10)</sup> [Larbi et al. 2009: 3, 5-7]、小規模農家による栽培が行われてきたことが指摘できる。チュニジア国内では59の品種が栽培されているが、中部、南部をはじめとして乾燥に強い *chemlali* が全国の約3分の2の地域で栽培されているとされる [Larbi et al. 2009: 7]。ヨーロッパなどに比べて乾燥地帯であるために、その年の生産量が雨量に大きく左右されるという特質があげられる<sup>11)</sup>。

オリーブが有するのはこのような経済的側面だけではない。チュニジアで最も権威のあるモスクの名はザイトゥーナ・モスク (オリーブのモスク *Jāmi' al-Zaytūna*) と呼ばれ、このモスクがイフリースキーヤの法学的権威を独占してきた [Chater 2002: 488-490]。オリーブという名については、もともとキリスト教修道士の隠居場所があり、その近くにオリーブの樹があったことに由来していると言われている [チュニジア文化・遺産保存省 2012年8月28日閲覧]。その他にも、チュニジアでオリーブの名のついた企業や機関が多いことは、チュニジアの歴史・文化とオリーブが密接な関係

8) Reat は、アラビア半島においてイスラーム成立以前から樹木に関する神話的な信仰が存在しており、それらがイスラーム成立後も存続していることから、「異端的」ながらもイスラーム化されて、現在まで残っていると述べている [Reat 1975: 1-8]。

9) 特に1962年にオリーブ油を優先的に輸出することで経済・社会の発展を図る国家開発計画が打ち出されたことにより、オリーブ油の生産量は拡大していった [Karray 2006: 2]。このように、チュニジアのオリーブ油生産は、海外への輸出と密接に関わってきたといえる。

10) Larbi によれば、それらのチュニジアの農業従事者のうち43%が60歳を超えており (2005年)、高齢化が問題となっている [Larbi et al. 2009: 5-7]。

11) 例えば2001年の生産量3万トンと、2003年の28万トンのように、年によって生産量の差が著しい [FAOSTAT 2012年8月28日閲覧]。

り合いにあることを示している。例えば、ラジオ局の *Idhā'a al-Zaytūna* FM (FM オリーブ放送局)<sup>12)</sup>、イスラーム銀行の *Maṣrif al-Zaytūna* (オリーブ銀行) などの他にも、カフェやレストランなどの名前にオリーブの名はよく付される。また、現在のチュニジアの5 ミッリム貨幣の両面、1 ディナール貨幣の表面、5 ディナール貨幣の裏面にはオリーブの絵が描かれている。このように、チュニジアで様々な企業や商店の名にオリーブが付されていることは、何らかの意味を想起させるような存在であることが伺える。

以下では聞き取り調査と参与観察の資料から、民衆がオリーブに対して感得する意味や概念の一端を明らかにしたい。

### 3-2. オリーブに関する聞き取り調査と参与観察

本論は、2010年9月～11月、2012年2月～4月の計約4ヶ月間の現地調査によって得られたデータをもとにしている。調査は後述するオリーブグッズの販売所において販売者や購買者に聞き取り調査を行った。販売所はチュニジア国内の都市や地方に分散するよう、チュニス、スース、マフディア、スファックス、ガベス、メドニン、ドゥーズ、タタウィンにおいて行った。聞き取り調査の対象は47人であり、年齢は幅広い層を心掛けたが、インフォーマルインタビューであるために、10代1人、20代11人、30代4人、40代7人、50代15人、60代9人という結果になった。

また、人々とオリーブの関係をより詳細に調査するため、タタウィン県においてオリーブを栽培している農村地（主に滞在したのはシェニニ村・108世帯<sup>13)</sup>）に、2010年10月と2012年2月～3月の計約3ヶ月間住み込み、聞き取り調査と、農作業やオリーブの加工工程、オリーブやオリーブ油の使用方法を参与観察した。タタウィン県を選定したのは、チュニジア南東部の樹木の75%がオリーブともされるように [Fleskens et al. 2005: 614]、代表的なオリーブのモノカルチャー経済地域であることや [Farge 1973]、オリーブとの歴史的・文化的な関わりが顕著に見出せること [Zaid 2006: 130] による。

以下ではそのような調査により得られた資料から、(1)オリーブをモチーフとした商品、(2)オリーブをどのような言葉を用いて表現するか、(3)農村におけるオリーブと人の関わり、という3点を提示する。インフォーマントが語る言葉で特に重要と思われる表現はアラビア語チュニジア方言をカタカナ表記にし、括弧内に正則アラビア語と日本語訳をつけた。

#### (1) オリーブをモチーフとしたグッズについて

チュニジアでは、オリーブをモチーフとしたグッズが室内装飾具店、プレゼント店などで販売・購入されている。これらは調査をした8つの地方のすべてにおいて見出せる商品であり、チュニジアで一般的に販売・購入されている商品であることが理解できる。

このグッズは、チュニスやスファックスなどの都市の個人経営の工房で製作されており、額縁などの付属品を除いて全てのパーツが国内で製作されているという。筆者はチュニスの工房においてこれらのオリーブグッズを専門的につくる職人を参与観察した<sup>14)</sup>。アルミなどの金属でオリーブ

12) このような大企業の名に何故オリーブの名が付されたかは今回の調査では明らかにすることはできなかった。オリーブ放送局は、チュニジアで最初にクルアーンやハディースの朗誦を行ったラジオ局であるとされ、それらの放送は正しいイスラームを教えるためであるとされる [Le journal du dimanche 2012年8月28日閲覧]。

13) 県庁の置かれているタタウィン市街地から16kmほど南西にある村で、古くからオリーブ栽培が主な生業とされてきた [Louis 1975: 46-53]。

14) 装飾具は、①アルミを鋳型にはめて葉の形をつくる、②つくられた葉を棒状のアルミに溶接する、③アルミの内部の木材を加工する、④アルミでつくられた幹・枝・葉を木材にはりつける、⑤枝の先に琥珀を貼り付ける、⑥

のミニチュアの形状をつくり、枝の先に琥珀をつけることがそれぞれのグッズに共通しているものの、その形状の種類や大きさは多様である。そのほとんどが額縁タイプか(写真1)、置物タイプであり(写真2)、樹木の高さが15cmほどの小さいものから(約3TD<sup>15)</sup>、大きいものでは60cm四方の額縁もある(約100TD)。

これらのオリーブグッズは少なからず宗教的な意味を持つとみなされることがある。その理由の第一として、それらがクルアーンやモスクのミニチュアなどの宗教的な商品と同じ場所に置かれていることがあげられる。筆者が調査した8つの地方の販売所において、いずれもこのオリーブグッズがおかれている同じ棚や、近くの棚において、クルアーンなどの商品が置かれていた(写真3)。第二の理由として、販売者や購買者に聞き取り調査を行ったところ、多くのインフォーマントから、この商品は宗教的なものであるとの回答が得られたことによる。例えば筆者がタタウィン市内にお



写真1 2012年3月12日筆者撮影(スース)



写真2 2012年3月16日筆者撮影(チュニス)

それらを額縁やケースなどに入れて固定する、などの作業に分かれており、それらの工程をひとつのアトリエで全て行う場合もあるが、①～⑥の各作業を専門に行う職人もいる。特に①の葉の部分の作成は大量生産する必要があるため、他の②～⑥とは別の工房でなされる事が多いという。

15) 1TD (チュニジア・ディナール) は49.1円(2012年8月31日現在)。



写真3 2012年3月14日筆者撮影（スース）

いて販売者にオリーブグッズのことを聞いたところ、次のような答えが返ってきた。

Q：ハージャ・ディーニーヤ (*ḥājāt dīniyāt*, 宗教的な商品) を探しているのですが。

A：宗教的な品ですね。(アッラーと書かれた額縁を示し) この辺でしょうか。

Q：ああ、そういうものです。

A：こういうムスハフ (クルアーン) とか、カアバ神殿とかです。あと、こちらの上の棚にあるものとか。これはクルアーンの章句です。(中略、説明続く……)

Q：このオリーブの樹もそうなのですか。

A：そうです。

Q：なぜオリーブの樹が宗教的商品なのですか。

A：クルアーンに「オリーブとイチジクの樹」と書かれているからです。

Q：ではイチジクもこのような商品があるのですか。

A：いえオリーブだけです。

Q：なんでオリーブだけなのですか。

A：……こういうものなのです。

(20代・女性・タタウィン・雑貨屋店員・2012年3月7日)

などといった説明を受けた。また、次の会話はチュニスにおいて購買者との会話を記録したものである。

Q：オリーブのプレゼントを買っているのですか。

A：そうです。

Q：何故オリーブの樹がプレゼントにされているのですか。

A：これはバラカだからですよ。クルアーンにあるからです。

Q：どのように使うのですか。

A: 結婚式や新しい家に引っ越した時にプレゼントします。ちょうど甥が結婚するのでプレゼントするのです。壁に飾っておくといいことがあるのです。

(40代・女性・チュニス・購買者・2012年3月16日)

このように、バラカという概念でオリーブグッズを説明するインフォーマントもいた。新居などの家に飾っておくと、よいことがあると考えられており、実際に筆者はこれらのオリーブグッズを見かけたことがあり(2010年11月1日、ドゥーズ・結婚後の新居にて)、結婚の際のプレゼントとしてもらい受けたという説明を受けた。

このように、オリーブグッズは、単なる装飾具というよりも、バラカなどのいいことをもたらす宗教的な意味がある商品として位置づけられていることが理解できる。もちろんそれがクルアーンなどのモノと同じような位置づけかと言えば、「クルアーンは特別なものであるので、クルアーンとは違う」と語るインフォーマントがいるように(40代・男性・タタウィン・2010年11月8日)、クルアーンなどの宗教的な商品と同等にみなされている訳ではない。しかしながら、単なる装飾具でもない存在であることが理解できる。

## (2) オリーブをどのような言葉を用いて表現するか

調査期間中に、筆者はオリーブについて住民たちが語る表現や言葉を記録した。例えばインフォーマントは次のようにオリーブを語った。

オリーブの樹はバラカ (*baraka*, 祝福) をもたらすという意味がある。オリーブの樹は他の樹と違いムカッダス (*muqaddas*, 神聖) である

(60代・男性・タタウィン・2010年10月9日)

オリーブとイチジクはシャジャラ・ムバラカ (*shajara mubāraka*, バラカを与えられた樹)。オリーブはシャジャラ・ムカッダサ (*shajara muqaddasa*, 神聖な樹)。イチジクも大切だが、オリーブは違う意味がある。

(40代・男性・メドニン・2012年4月7日)

オリーブの樹はサラハ (*ṣalāḥ*, 役に立つもの) であり、ムバラカ (*mubārak*, バラカを与えられたもの) である。イチジクやナツメヤシもバラカはあるが、それらよりもバラカは強い。

(10代・女性・タタウィン・2010年10月23日)

他にもインフォーマントは、特別 / *khāṣṣ* / special、大切 / *hāmm* / important、祝福された / *mubārak*、神聖な / *muqaddas*、女王 / *malika*、役立つもの / *ṣalāḥ*、不可欠のもの / *vital*、生活のシンボル / *symbol de la vie* (アラビア語チュニジア方言 / フランス語) などといった言葉でオリーブを語った。最もよく使われる表現は「祝福された」、「恩寵のある」などという意味の *baraka* と *mubārak* という語であり、オリーブがバラカと密接な関連性のある樹木であることが確認できる。「神聖」などという意味の *muqaddas* については、

オリーブとナツメヤシとイチジクとブドウはムバラカ (*mubārak*, バラカを与えられた) 樹で

ある。しかし、ムカッダス (*muqaddas*, 神聖) は神のみに使う言葉なのでよくない

(50代・男性・タタウィン・2010年11月1日)

と語る人もいた。

上述の記録は筆者とインフォーマントとの間で行われた会話であるが、これとは別に、筆者が農作業などの参与観察を行う中で、住民が自発的にオリーブをバラカであると語った事例も見出すことができる。例えば、一日の農作業の最後に果実の収穫が終わり、それを籠に移す局面において「バラカ」とつぶやく状況を記録した(40代・男性・タタウィン・2012年2月18日、50代・男性・タタウィン・2012年2月19日、50代・男性・タタウィン・2012年3月8日)。また、「今年は豊作でしたね」とこちらが尋ねた返答として「そうですね。これはバラカですね。」などといった返答が返ってくることもあった(50代・男性・タタウィン・2012年3月8日)。このように、インフォーマントの生活のなかで、オリーブがバラカという概念によって語られる状況があることが理解できる。

何故オリーブは神聖やバラカなどといった言葉で語られるのかとこちらが問うたところ、インフォーマントは様々な答えをもってオリーブの特異性を説明した。便宜上、筆者がそれらの回答をおおまかに分類したところ、次の3点による説明が主たるものであった。①クルアーンに記されていることによる説明、②オリーブの利用価値による説明、③オリーブの生命力による説明である。

①クルアーンによる説明に関しては、多くのインフォーマントから

オリーブの樹が他の樹と違い神聖であるのは、クルアーンに書かれているからである。

(60代・男性・タタウィン・2010年10月10日)

オリーブはクルアーンに明記されているので、バラカを与えられたものであり神聖である。イチジクとオリーブが明記されている。しかし、オリーブは別にオリーブオイルの記述があるために特別である。

(60代・男性・タタウィン・2010年10月25日)

などといった説明を受けた。実際にクルアーンにはオリーブに関する記述が6箇所にわたり存在する。特に24章35節<sup>16)</sup>は彼らが説明する際に、頻繁に引用する箇所である。しかし、クルアーンの中にはナツメヤシやブドウ、ザクロなどその他の樹木も神が与えたものとして記されている。インフォーマントはこのクルアーンによるという説明に加えて、②オリーブの利用価値や、③生命力が他の植物とは違う事を語り、その特異性を説明する。

②利用価値については、

光は今は電気ですが、昔はオリーブ油に布をたらして燃やしていました。だからです。他にも食事にもなるし、薬にもなります。薬は喉や肌の荒れも治します。

16) 24章35節は「アッラーは、天地の光である。かれの光を譬れば、燈を置いた、壁龕のようなものである。燈はガラスの中にある。ガラスは輝く星のよう。祝福されたオリーブの木に灯されている。(その木は)東方(の産)でもなく、西方(の産)でもなく、この油は、火が凡んど触れないのに光を放つ。光の上に光を添える。アッラーは御好みの者を、かれの御光に導かれる。アッラーは人びとのために、比喩を挙げられる。本当にアッラーは凡てのことを知っておられる。」(『日亜対訳・注解 クルアーン』日本ムスリム協会)。

(60代・男性・チュニス・2012年3月17日)

それは全ての薬になるからです。全てです。例えば肌にもいいし、喉の痛みも和らげます、髪の毛にもつけます。

(50代・女性・マフディア・2012年3月13日)

などといった説明がなされた。それらの説明のなかでも薬として利用できることは、オリーブがバラカや神聖である理由として最も頻繁に語られた理由であった。実際に、農村部ではオリーブ油は喉の痛み、頭痛、筋肉痛、関節痛、胃痛などに効くと言われている。またオリーブ油だけでなく、その搾りかすさえも胃によいとされる。筆者の参与観察でも、風邪をひいたインフォーマントがオリーブ油を飲んでいるところ(2012年3月10日)や、オリーブ油の搾りかすが胃によいと言って食べている場面(2012年4月6日)に出くわしたことがある。チュニジア人文学者である Zaided はオリーブ油のことを「ほとんどすべての病気から身を守り、健康を保障してくれる」とし、それがゆえに「神の液体」(Le liquide divin)とも表現している [Zaided 2006: 133]。

薬用以外にも、村内では様々なオリーブが利用されている。オリーブの果実や油を食用にすることはもちろんのこと、オリーブ油は髪や肌を守る美容液、搾りかすは家畜に与える良質の餌、木材は建築や農具の資材、根や幹は木炭に加工されて村内での燃料となる。また、村内の農民の現金収入になっているという側面もある<sup>17)</sup>。このように、オリーブは実際に様々な用途によってチュニジア南東部の農村部の人々を支えている事が理解できる。

③オリーブの生命力については、

イチジクも大切だが、オリーブは違う意味がある。何故なら、オリーブは長い年月生きる。500年以上も生きるものがある。タタウィンには15年間雨が降らない土地があるが、それでも生きている樹がある。それは不思議な事ではないか。また、ヨーロッパでも育つのに、サハラでも育つ樹である。どこの地域、気候でも育つのがオリーブであり、どこでも適応するのが、オリーブが特別な理由である。

(40代・男性・メドニン・2012年4月7日)

(オリーブの樹が他と違うのは) その生命力による。死なない樹だから。他の植物が乾燥により枯れている時でも「オリーブの樹は常に緑である」とも言われる。

(10代・女性・タタウィン・2010年10月23日)

などといった説明がなされる。「オリーブの樹が死なない」「乾燥地において他の樹が枯れている時

17) 2005年の調査では108世帯の村において、平均して1世帯37本のオリーブの樹を所有している(農業省の下部組織である地域農業開発省 Commissariat Regional de Développement Agricole が2005年に行った調査の資料に基づく)。各世帯が1年間にどのくらいの収入をオリーブから得ているのか数量的に調査結果は得られていないが、2012年春の収穫においては多くの農家から300Lから多い農家では1500Lのオリーブ油の収穫があった。これを販売価格で計算すると、1500~7500TDの収入をオリーブ油から得ていることとなる。

でも、枯れない」などという説明は<sup>18)</sup>、多くのインフォーマントから説明されることである<sup>19)</sup>。

### (3) チュニジア南東部の農村におけるオリーブをめぐる儀礼・慣習

上記では、人々が語る台詞に依拠しながらオリーブが持つ意味を考察したが、ここではチュニジア南東部のフィールドにおいてみられるいくつかの事例を考察する。

一つ目は、南東部でもジェルバ島において特有にみられるバルブーラ (*barbūra*) と呼ばれる儀式である。この儀式は、結婚式の際にオリーブの樹を訪ね、若い男もしくは女が5人連なり、樹木の周りを左周りで3周回する。その後キブラに向かいサラートを行うものであり、この儀礼により、新婚夫婦にバラカが与えられるとする。また同様の儀礼ではオリーブの枝葉を用いて、新郎は男児を、新婦は女兒をたたくことにより、子供が早く結婚するようになるという。実際にインフォーマントは次のようにこの儀式を説明する。

A: ジェルバでは結婚式の際にオリーブの樹を回る風習があります。

Q: なぜオリーブの樹を回るのですか?

A: バラカが与えられるからです。他にも、オリーブの枝を持って小さい子を叩きます。これには子供が早く結婚するようだという意味が込められています。

(20代・女性・ジェルバ・2012年4月5日)

バルブーラで周回する樹木は、それぞれの家の近くにある特定の樹木である。これらのオリーブの樹木に聖者やジンの存在があるという説明は受けたことがなく、何故オリーブが新婚夫婦にバラカを与えるのかと筆者が質問すると、インフォーマントは様々な説明によって説明をする。

A: オリーブがインダ・ラッビー (*'inda rabbī*, 我が主のもと) にあるからです。シャジャラ・ムカッダサ・ミン・インダ・ラッビー (*shajara muqaddasa min 'ind rabbī*, 我が主のもとの神聖な樹) といいます。タフスィールです。

Q: タフスィールですか? これはどこかのタフスィールに書かれているのですか?

A: いいえ。書かれている訳ではなくて、私の解釈です。

(20代・女性・ジェルバ・2012年4月5日)

それはシャジャラ・ムカッダサ (*shajara muqaddasa*, 神聖な樹) だからです。回ることでバラカが得られるのです。…… (中略) ……ジェルバは昔から交易者の島として栄えて、島の外で働く人が多かったです。そういう人たちは、残された家族たちをオリーブの樹が食べさせてくれるように頼んだといいます。

(50代・男性・ジェルバ・2012年4月6日)

このような事例以外にも、チュニジア南東部の慣習とオリーブは密接に関わっている。奥野が現

18) タタウィン県は年間降水量 100mm 前後の乾燥地帯で、「降水は不確実で、貧弱な地面」と述べられるように [Mzabi 1989: 23-24, 153]、同地域の植生は乏しく、栽培可能な土地と作物はかなり限定されている。インフォーマントが先述のような語りをする時、このような過酷な環境であることが、オリーブの生命力が特異であることを更に際立たせているとも言える。

19) あるインフォーマントはローマ時代から生きている樹があると語り、あるインフォーマントは *shajara halla* という名前の付いたオリーブの樹がこの地域で最も古く、樹齢は 900 年であると語る。

地の人々の自然に対する作業・利用の方法や作法は、彼らの自然に対する世界観が表出する場であると述べるように〔奥野 2011〕、現地の農作業やオリーブの利用方法に、彼らのオリーブに対する世界観がみてとれる。例えば、

私たちの村では、オリーブを収穫する際に、樹に触らずに落ちてくるのを待つ。それはオリーブを大切に扱うために、樹に触らないからである。

(40代・男性・タタウィン・2010年10月3日)

と述べるように、オリーブを尊重するがゆえに、それらが行為として示されると語るインフォーマントがいる<sup>20)</sup>。筆者が2012年の収穫期において参与観察したところ、確かに地面に落ちた実を拾う収穫方法がなされながらも<sup>21)</sup>、枝をしごきながら収穫する場合もあり<sup>22)</sup>、その収穫方法が常に守られている訳ではない。しかしながら、そのような収穫方法を用いる理由として、オリーブを尊重する動機によって説明するインフォーマントがいるという事が注目に値するであろう。

また他の事例においては、

オリーブの葉は家畜に与えることはない。それはハラームに等しい。オリーブの樹を勝手に切ることは、大変な悪徳とされている。

(60代・男性・タタウィン・2010年10月10日)。

オリーブの葉を家畜に食べさせることはハラームである。他の樹は食べさせるが、オリーブは食べさせない。

(30代・男性・タタウィン・2010年10月25日)。

などと語られることがあった。筆者の参与観察においては家畜を放牧させる際に、神経質に家畜がオリーブの樹に近づくのを防止する場合もあれば、剪定して切られた枝葉はヤギなどの家畜に与えられるなどといった場面もあった。つまり、先の事例と同様に、必ずしも守られている訳ではないが、オリーブを尊重する行為としてインフォーマントが説明づけていることが指摘できる。

本節では、チュニジアにおいてオリーブが神聖な樹、バラカの樹といった言葉で語られることがあり、イスラームの信仰に関係していることを示した。オリーブがそのような宗教的な意味を強く示すのは、クルアーンに記されていることに加えて、それが病気治療などをはじめとして、家畜の餌から燃料、または現金などといった現世利益につながること、乾燥地帯という環境においても他の植物とは違う特異な生命力を持っていることが理由としてあげられた。インフォーマントの一人からも、樹木に聖者やジンの存在があるという説明はなされなかった。

20) しかしながら、インフォーマントによっては、「収穫期が遅いのは、より美味しいオリーブ油を精油するためである。」(30代・男性・タタウィン・2012年3月8日)と語る場合もある。つまり、この行為に対する解釈の有り様も、住民によって違うことが理解できる。

21) 調査地の収穫は実が樹から落ちるのを待つ為に、他の地域に比べて2ヶ月から3ヶ月ほど遅れてはじまる。2012年の場合は2月に入り各農家が収穫を始めた。

22) 調査地においては、実を樹から落とす作業であるハルターン (*harutān*) と、落ちた実を集めて拾う作業であるマスハーン (*masuhān*) は別の作業として区別される。マスハーンがオリーブを大切にしているがゆえになされる行為として説明され、調査地に特有の収穫方法であるが、実際にはハルターンも行われる。

#### 4. 考察

第2節で述べたように、これまでイスラーム世界各地の樹木に対する信仰を理解する際には、聖者やジンの存在がその対象に顕現することに焦点が当てられてきた。それらの研究においては、民衆が樹木に示される聖者やジンの存在に対して、恐れたり、病氣治癒やバラカを求めて祈願する事例が考察されてきた。

一方で、本論の事例が示すのは、聖者やジンといった存在に関わらず、チュニジアのムスリムにとって、オリーブに信仰上の意味が認められるという事である。オリーブがもたらす病氣治癒など様々な利益を神のバラカとみなし、乾燥地でも死なないその生命力に神の力を感得し、結婚後に神のバラカを得られるようにオリーブの樹のもとで祈願をする。そして、人々はそれらをイスラームの信仰のなかに位置づけているといったことが理解できる。

聖者はバラカの視覚的な受け取り手であり、バラカを人々の間に広めるとされるように [Gellner 1969: 74]、聖者たるゆえんの大きな要素として、バラカとそれを奇蹟などの発現を通じて民衆に伝えることがあげられる。そしてそのようなバラカの発現としてみなされる一般的な事象に、病氣の治癒や現世利益をもたらすということがあげられる [大塚 1989: 79]。このことと、チュニジアのオリーブの事例がある部分で類似しているのは、オリーブもインフォーマントにとってバラカをもたらす存在であるとみなされ、その理由として病氣治癒や現世利益が説明されている点である<sup>23)</sup>。

大塚はムスリムとアッラーの関係を交換論的に考察し、両者の間に聖者を介する「間接的交換」という概念を示す [大塚 1989: 121-134]。この場合、〈神-聖者-ムスリム〉という構図で、ムスリムは聖者を介して神との間で祈願や現世利益といったやりとりをすることとなる。第2節で示した先行研究の多くの事例においては、聖者にゆかりのある樹木が聖者の存在や力を示すということであった。聖者は既に死んでいるために、〈神-聖者(樹木)-ムスリム〉といったように、樹木を通じて聖者の力(その源泉は神の力)が示されることとなる。また、樹木を通じて聖者(ひいては神)に取り入るといった逆方向の構図もなりたつ。

一方、チュニジアにおけるオリーブの事例においては、聖者やジンといった存在が樹木に顕現するとみなされているわけではない。しかしながら、オリーブは先述したように民衆の病氣を治し、利益をもたらし、また通常不可能な特質をそなえる事によって、現地のムスリムにバラカなどの神の力を感得させている。つまり、〈神-樹木-ムスリム〉という経緯により神の力が示される。チュニジアという地域において<sup>24)</sup>、ジンや聖者などの存在抜きにしても、オリーブは神のバラカを示す媒体であることが理解できる。アッラーが抽象的で遠い存在であるのに対して、聖者が可視的な実感をもって神のバラカを具現する者 [大塚 1989: 158; 赤堀 2004: 241-425] であるとなれば、オリーブも同様に神のバラカを可視化・具現化するモノであるといえる。

このように、ある部分では聖者とオリーブは同じような役割を持つ一方で、それらの間には当然ながら違いも存在する。その特筆すべき点は、聖者や聖者廟と比して、オリーブは彼らの日々の生活の中で使われているという事であろう。例えばチュニジアの家庭において、オリーブオイルは毎

23) 加えて、オリーブは他の樹木とは違う不思議な生態を有しているということが、バラカの樹である理由としてインフォーマントから説明されているということは、通常不可能と思われることを神のバラカによりなし得るといふ奇蹟 (karāma) の概念と類似しているとも考察できるかもしれない。インフォーマントは直接「奇蹟」という言葉でオリーブを語った訳ではないが、今後も調査を続ける上での一つの課題であろう。

24) 「チュニジアという地域」という地理的な範囲に関しては、オリーブグズがチュニジアの8つの調査地において共通して確認でき、それぞれの地で同じようなインフォーマントの語りを得られたことから想定できる。しかしながら、チュニジア国内においても植生や文化は地方によって異なるので、よりミクロな地域的な差異が見られるかどうかは、今後の課題である。

日の料理に使われるほど日常的なものである。しかしながら、それがある場面では宗教的な役割を担うことがある。例えば本論でとりあげた事例においても、ある特定のオリーブではなく、チュニジアの民衆の間で日常的に使われているオリーブやオリーブ油が、収穫期において住民たちに恵みをもたらす局面や、病氣治癒をする局面において特に神のバラカを感得させていることが理解できる<sup>25)</sup>。このように日々の生活の中にあるモノが、可變的に神のバラカを具現し、感得させ、ムスリムと神の間で媒介的な役割を担うことがある。オリーブはこのような役割を潜在させており、それがある局面で発現するという見方もできる<sup>26)</sup>。

このように、ある対象を可變的にとらえる視覚をもつことで、あるモノがムスリムの信仰にとって大きな意味と役割を担う場合があることが理解できる。イスラームにおけるモノの意味と役割については、Schimmel が個別具体的なそれぞれのモノがイスラームにおいてどのような意味を持つかということを経験学的に考察することの意義を示している [Schimmel 1994]。この Schimmel の神学的な側面からの考察にも増して、人類学的な考察が必要とされると思われるのは、このように民衆の間における日常的なモノが、どのような局面で宗教的な意味を顕現させ、神と人とを媒介するモノとしてたち現れるのかという動態を考察できるからである。

## 5. おわりに

人類学的な研究においては、モノに着目した考察が近年活発になり、モノと概念をめぐる議論が盛んに行われている [Henare et al. 2007; 足立 2009 など]。「一見すると非物質的な領域に属するような活動、たとえば「神」、「あの世 (他界)」、「霊」などの「メタフィジカル」な存在に関する」とされる宗教や信仰の領域においても、(中略) 物質的ないし身体的な次元が伴う」と述べられているように [床呂・河合 2011: 3]、宗教や信仰の分野においてもモノに着目しようという動きがある。

「厳格な一神教」的側面をもつと考えられがちなイスラーム世界においては、自然やモノに対する信仰を、アニミズムなどといった概念を用いたりすることで非イスラーム的なものと解釈するきらいがあることは、先述した通りである。しかしながら、イスラーム世界にあるモノがムスリムの信仰に関わらないという訳ではないであろう。むしろ、そのような一神教としてのイスラームの信仰においてこそ、モノの意味や概念が民衆にどうたち現れるのかという問いは、意義があるのではないだろうか。例えば、イスラームのバラカという概念が、オリーブによってチュニジアのムスリムにたち現れてくる本論の事例が示すように、あるモノがイスラームの信仰にとって重要な役割を担うことがあるからである。

このようなモノを通じたイスラームの考察は、地域固有のイスラームのあり方や、多様なイスラームの理解を促進する可能性を有しているように考えられる。本論を閉じるにあたって、このようなモノを通してイスラームを理解することによる展望を述べたい。例えば、本論で扱った、オリーブのモチーフをグッズ化させ、バラカをもたらすものとして家に飾ったり、神聖なものであるなどと語ったりする事例は、チュニジアに特有なことであると思われる<sup>27)</sup>。チュニジアというオリーブ

25) 本論のもととなった調査では、このような局面においてのみバラカという言葉が住民から発せられたが、より長期的な調査により、それらのモノがどのような局面でバラカとみなされるのか、その動態をより長期的に調査することが課題の一つであろう。

26) 「潜在」という言葉は [森田 2011] において、ある関係がそのモノに潜在しており、それがあらわになるという考察から引用した。

27) 前述したようにクルアーンにも記されているオリーブが、イスラーム世界の各地で宗教的な意味を潜在させないという事はないであろう。筆者はエジプトのムスリムからも「オリーブが神のバラカであり、健康にとってもいいものである」という語りを聞いたことがある。しかしながら、このように顕著に見出すことができるのはチュニジアに特有の事象と考えられる。筆者のフィールドがチュニジアを専門としているため、他の地域と比較した場

が地域の歴史や経済、文化と深く関わりを持つ地であるからこそ、現地のムスリムの信仰において持つ役割が強くなるのだとも言える。

赤堀は個々の時代状況や地域の固有性と折り合いをつける補完的な機構を有する聖者の役割に着目しているが〔赤堀 2005: 24〕、モノにおいてもその時代や地域固有のイスラームの特徴を示す場合がありえよう。このように、人（聖者）以外にもモノを通じて民衆のイスラームを理解しようとする視座は、イスラーム世界における地域の固有性や多様性の更なる理解につながるのではないだろうか。モノを通じたイスラーム研究は、神の力が具現するというイスラーム世界に通底する「イスラームの一体性」と、それが具現される対象やなされ方は地域性が反映されるという「イスラームの多様性」とを理解する可能性を秘めているように考えられる。

### 参考文献

- 赤堀雅幸 2004 「イスラームの聖者と聖者のイスラーム——民衆信仰論の一環として」『宗教研究』78(2), pp. 445-466.
- 2005 「聖者信仰研究の最前線——人類学を中心に」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』（イスラーム地域研究叢書7）東京大学出版会, pp. 23-40.
- 足立明 2009 「人とモノのネットワーク——モノを取りもどすこと」田中雅一（編）『フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会, pp. 175-193.
- 大塚和夫 1989 『異文化としてのイスラーム』同文館出版.
- 大稔哲也 2009 「コメント——ムスリム社会の聖遺物——聖遺物とイスラーム」『死生学研究』12, pp. 106-119.
- 奥野克己 2011 『人と動物、駆け引きの民族誌』はる書房.
- 小杉麻李亜 2006 「クルアーン・グッズ」小杉泰・江川ひかり（編）『イスラーム——社会生活・思想・歴史』新曜社, pp. 93-96.
- 小杉泰 1999 「イスラーム世界の東西：地域間比較のための方法論的試論」『東南アジア研究』37(2), pp. 123-157.
- 小牧幸代 2002 「インド・イスラーム世界の聖遺物信仰——< 遺されたもの > 信仰の人類学的研究に向けて」『人文学報』87, pp. 103-143.
- 斎藤剛 2010a 「聖者信仰の「本質化」を超えて——モロッコにおけるフキーの治療の事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』80, pp. 61-96.
- 2010b 「バラカ概念再考——モロッコをフィールドとした人類学的ムスリム聖者信仰研究の批判的検討」『イスラーム世界』74, pp. 1-32.
- スミス, ロバートソン 1941 『セム族の宗教』（永橋卓介訳）岩波書店.
- 鷹木恵子 2000 『北アフリカのイスラーム聖者信仰——チュニジア・セタダ村の歴史民族誌』刀水書房.
- 東長靖 1999 「『多神教』的イスラーム——スーフィー・聖者・タリーカをめぐる』歴史学研究会（編）『社会的結合と民衆運動』（地中海世界史5）青木書店, pp. 192-220.
- 床呂郁哉・河合香吏 2011 「なぜ「もの」の人類学なのか？」床呂郁哉・河合香吏（編）『もの人類学』京都大学学術出版会, pp. 1-21.
- 森田敦郎 2011 「モノと潜在性——タルド的視点に基づく機械の民族誌の試み」『文化人類学』76(1), pp. 33-50.

---

合にどのような差異が認められるかは今後の課題の一つであろう。

- Altman, N. 2000. *Sacred Trees*. New York: Sterling Publishing Company.
- Astley, D. H. J. 1910. "A Sacred Spring and Tree at Hamman R'Ihra, Algeria," *Man* 10, pp. 122–123.
- Blackman, A. M. 1925. "Sacred Trees in Modern Egypt," *Journal of Egyptian Archaeology* 9, pp. 56–57.
- Brett, M. 1990. "Islam in North Africa," in P. Clarke ed., *The World's Religions: Islam*, London: Taylor & Francis, pp. 23–47.
- Buhl, M. L. 1947. "The Goddesses of the Egyptian Tree Cult," *Journal of Near Eastern Studies* 6(2), pp. 80–97.
- Chater, K. 2002. "Zaytūna," in H. A. R. Gibb ed., *The Encyclopaedia of Islam New Edition*, vol. XI, Leiden: E. J. Brill, pp. 488–490.
- Crapanzano, V. 1973. *The Ḥamadsha: A Study in Moroccan Ethnopsychiatry*. Berkeley: The University of California Press.
- Dafni, A. 2002. "Why are Rags Tied to the Sacred Trees of the Holy Land," *Economic Botany* 56(4), pp. 315–327.
- . 2006. "On the Typology and the Worship Status of Sacred Trees with a Special Reference to the Middle East," *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine* 2(26), pp. 1–14.
- . 2007. "The Supernatural Characters and Powers of Sacred Trees in the Holy Land," *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine* 3(10), pp. 1–16.
- D'Alisera, J. 2001. "I ♥ Islam: Popular Religious Commodities, Sites of Inscription, and Transnational Sierra Leonean Identity," *Journal of Material Culture* 6, pp. 91–110.
- Deil, U., H. Culmsee & M. Berriane. 2005. "Sacred Groves in Morocco: A Society's Conservation of Nature for Spiritual Reason," *Silva Carelica* 49, pp. 185–201.
- Doutté, E. 1984(1908). *Magie et religion dans l'Afrique du Nord*. Paris: J. Maisonneuve et P. Geuthner.
- Dermenghem, É. 1982(1954). *Le culte des saints dans l'Islam maghrébin*. Paris: Editions Gallimard.
- Farge, P. 1973. "L'agriculture à Zarzis (Localité du Sud Tunisien)," *Méditerranée Deuxième série* 15, pp. 3–19.
- Farooqi, M. I. H. 1997. *Plants of the Qur'an*. Lucknow: Sidrah Publishers.
- Flekens, L., L. Stroonsnijder, M. Ouessar & J. De Graaff. 2005. "Evaluation of the On-site Impact of Water Harvesting in Southern Tunisia," *Journal of Arid Environments* 62, pp. 613–630.
- Gellner, E. 1969. *Saints of the Atlas*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldziher, I. 1967. *Muslim Studies*, vol.1. ed. S. M. Stern. tr. C. R. Barber & S. M. Stern. London: George Allen & Unwin.
- . 1971. *Muslim Studies*, vol.2. ed. S. M. Stern. tr. C. R. Barber & S. M. Stern. London: George Allen & Unwin.
- Henare, A., M. Holbraad & S. Wastell (eds.) 2007. *Thinking through things: theorising artefacts ethnographically*. New York: Routledge.
- Hornblower, G. D. 1930. "A Sacred Grove in Egypt," *Man* 30, pp. 17–19.
- Jaussen, A. 1908. *Coutumes des Arabes au pays de Moab*. Paris: Geuthner.
- Kan'ān, T. 1928. *Mohammedan Saints and Sanctuaries in Palestine*. London: Luzac & Co.
- Karray, B. 2006. "Olive Oil World Market Dynamics and Policy Reforms: Implications for Tunisia," *98th Seminar of the EAAE*, pp. 1–15.
- Karray, B., M. Msallam, M. Ksantini, D. B. Mahjoub & N. Gratikamoun, 2009. *L'Institut de l'Olivier: Tunisie*. Tunis: Ministère de l'agriculture et des ressources hydrauliques (Institut de la Recherche et de

- l'Enseignement Supérieur Agricoles).
- Kashiwagi K., N. Mtimet, L. Zaïbet & M. Nagaki. 2010. "Technical Efficiency of Olive Oil Manufacturing and Efficacy of Modernization Programme in Tunisia," *Contributed Paper Presented at 3rd African Association of Agricultural Economists (AAAE) and 48th Agricultural Economists Association of South Africa (AEASA) Conference*, pp. 1–14.
- Labaied, L. 1981. *L'olivier en Tunisie Etude Cartographique*. Tunis: Publications de l'université de Tunis.
- Larbi, W. & A. Chymes. 2009. "The Impact of the Government Policies and Incentives to Promote the Export of Agricultural Products in Tunisia: Case of Olive Oil," *Paper Prepared for Presentation at the 113th EAAE Seminar "A Resilient European Food Industry and Food Chain in a Challenging World"*, pp. 1–30.
- Leaman, O. 2006. "Trees," in O. Leaman ed., *The Qur'an: an Encyclopedia*. New York: Routledge, pp. 451–457.
- Louis, A. 1975. *Tunisie du sud: ksars et villages de crêtes*. Paris: Editions du centre national de la recherche scientifique.
- Lechler, G. 1937. "The Tree of Life in Indo-European and Islamic Cultures," *Ars Islamica*, 4, pp. 369–420.
- Marwat, S. K., M. A. Khan, M. A. Khan, M. Ahmad, M. Zafar, F. Rehman & S. Sultana 2009. "Fruit Plant Species Mentioned in the Holy Qur'an and Ahadith and Their Ethnomedicinal Importance," *American-Eurasian J. Agric. & Environ. Sci* 5(2), pp. 284–295.
- Musselman, L. J. 2003. "Trees in the Koran and the Bible," *Unasylya* 213(54), pp. 45–52.
- Mzabi, H. 1989. *La Tunisie du Sud-Est; Géographie d'une Région Fragile, Marginale et Dépendante*. Tunis: Université de Tunis, Faculté des Sciences Humaines et Sociales.
- Nūr al Dīn al-Nūrī 2002. *Al-Zaytūna Tharwa al-Ajyāl*. Tunis: [S. N.].
- Office de Développement du Sud. 2008. *Le Gouvernorat de Tataouine en Chiffres*. Tunis: République Tunisienne Ministère de Développement et de la Coopération Internationale.
- Parshall, P. 2006. *Bridges to Islam: A Christian Perspective on Folk Islam*. London: Authentic Publishing.
- Reat, N. R. 1975. "The Tree Symbol in Islam," *Studies in Comparative Religion* 19(3), pp. 1–19.
- Reilly, J. 1981. "The Peasantry of Late Ottoman Palestine," *Journal of Palestine Studies* 10(4), pp. 82–97.
- Schimmel, A. 1994. *Deciphering the Signs of God: A Phenomenological Approach to Islam*. New York: State University of New York Press.
- Sharma, U. & S. Pegu. 2011. "Ethnobotany of Religious and Supernatural Beliefs of the Mising Tribes of Assam with Special Reference to the 'Dobur Uie'," *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine* 7, pp. 16–29.
- Starret, G. 1995. "The Political Economy of Religious Commodities in Cairo," *American Anthropologist* 97, pp. 51–68.
- Taiqui, L., H. Bensalah & E. Seva. 2009. "La conservation des sites naturels sacrés au Maroc: est-elle incompatible avec le développement socio-économique?," *Mediterranea* 20, pp. 1–46.
- Waines, D. 2001. "Tree(s)," in J. D. McAuliffe ed., *Encyclopaedia of the Qur'an* vol. V, Boston: Brill, pp. 358–362.
- Westermarck, E. 1926. *Ritual and Belief in Morocco*. London: Macmillan and Co.
- Zaïed, A. 2006. *Le monde des ksours du sud Tunisien*. Tunis: Centre de publication universitaire.
- Zarcone, T. 2005. "Stone People, Tree People and Animal People in Turkic Asia and Eastern Europe," *Diogenes* 207, pp. 35–46.
- Zwemer, S. M. 1920. *The Influence of Animism on Islam*. London: The Macmillan Company.

オンライン新聞

Lajon, K. 2000(Oct. 24). “Les islamistes sous l’étouffoir,” Le Journal du dimanche.

<http://www.lejdd.fr/International/Maghreb/Actualite/Les-islamistes-sous-l-etouffoir-144757> (2012年8月28日閲覧).

オンライン文献

チュニア文化・遺産保存省 <http://www.patrimoinedetunisie.com.tn/fr/monuments/ezzitouna.php> (2012年8月28日閲覧).

FAOSTAT <http://faostat.fao.org/> (2012年8月28日閲覧).